

新しい広報を目指して

福司 大将

元 関東地方整備局 利根川ダム統合管理事務所 調査課（〒371-0846 群馬県前橋市元総社町593-1）

現 関東地方整備局 京浜河川事務所 調査課（〒230-0051 神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央2-18-1）

ダムは、近年の自然災害や大雨などから下流域に住む住民の生命・財産を守るための重要な施設といえる。しかしながらダムの役割や効果などといった理解は未だに低い水準にあると考える。利根川ダム統合管理事務所では今まで以上の広い方にダムを知ってもらい、気軽に情報を得られるようにすることを目的に従来の広報の見直しをするとともに新しい広報の充実を図った。本論文では、現在までのダム広報の取り組み状況、今後の課題について報告するものである。

キーワード アプリ、改善，“新しい広報”，ダム

1. はじめに

利根川ダム統合管理事務所は、直轄の藤原ダム、相保ダム、菌原ダム、ハッ場ダムを含め9ダムを管理している日本一の統合管理事務所である。水文データの収集・分析から運用、施設管理、ダム操作などを行うと共に近年の自然災害や大雨などの頻発化により下流域に住む住民の生命・財産を守るための重要な役割を担っている。

利根川ダム統合管理事務所では、HP、パンフレット、見学会での説明、資料館での展示などで広報を行っている。今まで以上の広い方にダムを知ってもらい気軽に情報を得られるようにすることを目的に従来の広報の見直しをするとともに“新しい広報”の充実を図ることになった。本論文は、現状の取り組み状況、今後の課題について報告するものである。



図-1 利根川上流ダム群配置図

2. 従来の広報の改善

初めの取り組みとして、事務所内の若手職員や期間業務職員を中心に“新しい広報”メンバーを構成し、利根川ダム統合管理事務所のHP（別図-2）を閲覧してもらい一般目線から感じることや課題点を出してもらい、初歩的な広報の手法であるHPの改善からはじめることにした。



図-2 修正前HP

課題点として、「文字が多く写真が少ないため情報が分かりにくい」、「専門的な情報が多く業者向けに感じられる」などが挙げられた。（表-1）

表－1 意見表

意見概要	実現性
TOPページが同じ色で何をしているのか解らない(事務所間、内容)	
TOPページに各ダム写真を入れて各ダムにすぐに入れるようにすればよい。	易
関係者(業者)向けの情報になっている。 (写真、絵、キャラクターなどを入れればいいのでは)	
文字が多い、写真が古い(ハッ場以外)	易
資料館の一般開放や内容をすぐに解るように(階層が深い)	
ダムカードの配布情報をもっと解りやすい箇所にいれるべき	易
9ダムを統合管理をしている「日本一の事務所」など積極的に情報発信していないのではないか。	

挙げた意見をまとめ、実現性が容易な意見を先行的に修正を行った。(図－3)

修正前と後で大きく変わった点は、各ダム写真のTOPページに入れたことである。

- ・写真をクリックするだけでほしい情報を手に入れることができる。
 - ・修正前では文字が画面の大半をしめて固い印象を受けるが、写真を入れることで柔らかい印象になる。
- 他にもダムカードの配布情報などを閲覧しやすい所に移動するなどの修正を行っている。



図－3 修正後のHP

3. 広報手法の充実

(1) 新型コロナウイルス対策

次の取り組みとして、広報手法の充実に図ることにした。広報の手法で考慮をしなければならないのが新型コロナウイルスに対応したツールである。全国に感染が拡大するなか社会、経済的にも多大な影響を与え緊急事態宣言などにより外出を控えてしまっている。しかし、ダム管理者としてダムの役割、効果などの理解をしていただけるよう広報を継続的に実施していかなければならないためまずは下記2点を基本コンセプトとして検討した。

- ・非接触でも対応可能

人と人との距離を確保し、感染リスクを軽減する。

- ・1人1人いつでもどこでも学べる

現場に行かなくてもいつでもどこでも情報を得られるようにする。

上記の新型コロナウイルスの対策案の他、「今まで以上に広い方にダムを知っていただく」、「気軽に情報を得られるようにする」の点を踏まえた結果、私たちの生活をする上で欠かせないアイテムのひとつであるスマートフォンを用いることにした。

(2) 多言語音声ガイドアプリ

多言語音声ガイドアプリとは、事前に録音をしたダムの役割、施設の効果などの情報を聞くことができるアプリである。直轄の藤原ダム、相俣ダム、菌原ダム、ハッ場ダムを対象に各支所からの意見を参考に現在の来訪者に対しての課題や対策、また各ダムの特色をガイドに組み込むなどを行い製作を進めた。

- ・閉庁日の対応

せっかくダムを訪れて頂いても、特に閉庁日は対応や説明をすることはできないが、このアプリを活用する事で端末ひとつで情報を得ることが出来る。

- ・説明の充実

自分の目だけでは理解しきれない何がどこにあるのか、それがどんな役割を持つのかなどの説明の補助をしてくれる。

- ・インバウンド対策

多言語(英語、中国語(簡体字、繁体字))に対応しており海外からの来訪者でもアプリを使えば情報を得ることができる。

- ・新型コロナウイルス対策

人と人との接触を必要としない、現場に行かなくても情報を得ることのできるため新型コロナウイルスへの感染対応にも適している。

また、各支所への聞き取りの中で近年、運用を開始

したハッ場ダムで問い合わせの件数として一番多いのがダムに関する内容ではなく、トイレの場所や駐車場の場所についての報告を受けた。他のダムでも同じ状況が想定されることから各ダムごとにマップ形式にトイレの場所、駐車場の場所を入れるようにした。



図-4 マップ表示

(3) 放流体験ARアプリ

多言語音声アプリと平行して製作を進めているのが放流体験ARアプリである。多言語音声ガイドアプリと同様に藤原ダム、相俣ダム、菌原ダム、ハッ場ダム、を対象にしている。内容としては、

- ・ダムの最大の見所である放流と普段一般の方は入れないダムの内部「監査路」をアプリを使って閲覧することができる。
- ・放流のCG動画には、こういった時に放流されるかが説明文として記載されているためダムの役割や操作についても理解しやすいようになっている。
- ・普段は入ることのできない監査路の中を見ることが出来るため、洞窟探検のような感覚を味わうことができる。
- ・ハッ場ダム限定ではあるが、AR機能がついているため端末を所定の位置に合わせることで自分の目の前で放流が流れているかのように見ることができる。
- ・人と人との接触を必要としない、現場に行かなくても情報を得ることのできるため新型コロナウイルスへの感染対応にも適している。

アプリ制作においては、“新しい工法”メンバーを中心に意見を募り、いかに興味を引いて頂くか(=ダムの役割や効果の理解)、使いやすさ、わかりやすさなどに注意し、一般目線に近づくよう、工夫を行った。

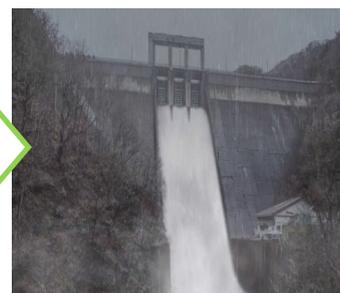


図-5 アプリ画面

4. 今後について

広報を行っていく上で、広報体制の継続は不可欠だと考える。

事務所内の若手職員や期間業務職員を中心にメンバーを構成し初めにHP、次にアプリの製作などを行ったが、実際に現地に行った際には、普段気づかないアイデアやイベントの提案、安全管理など様々な意見が挙がっていた。今後は、定期的に意見を取り交わし必要な改善を順次行い、よりよい広報を目指す。

また、アプリを作成しただけでとどまらないよう、効果の実証をしていく必要がある。どのようにして効果の実証をしていくかの方法については、今後の課題の一つであるがアプリというのは、必ず評価がついてくるコンテンツのためその評価が一つの効果の実証の材料になりえると考える。その評価を得るためにも、ご活用いただけるよう周知を行っていく必要がある。現時点では、ポスターやチラシを道の駅などに配布やHPに掲載などの手法を用いてアプリの周知をしていく方向である。その上で、意見・評価を基に機能の追加や修正を行っていく。



図-6 ポスター及びチラシ